



畑 道也 第 14 代院長を偲んで



本紙第 45 号に「畑家の人たち—畑道也氏との往復書簡にみる」をご寄稿いただいた正田吉男さんは、さらなる力作「カンオケ われらの時代—漱石・鑑三・道也の系譜をたどって」を『関西学院史紀要』第 24 号(2018 年 3 月 20 日発行)にお寄せくださいました。実は、このほかにも畑先生を偲ぶ声が当室に寄せられています。

2018 年 3 月 25 日、畑道也第 14 代院長が亡くなられて 10 年になりました。

(学院史編集部)

指揮者の心得

大 倉 隆 二(文学昭 46)

畑道也先生との出会いは、1967(昭和 42)年 4 月、熊本の片田舎から、音楽美学を学びたく、文学部美学科に入学したその日であったと思う。畑先生は美学科の助手をされていたが、下宿が阪急甲陽園日ノ出町の畑先生のお宅にも近かったこともあり、夜昼ともなく押し掛けて、今思えばずいぶんご迷惑をおかけした。

入学後は関西学院交響楽団(関オケ)に入り、バイオリンを弾いていたが、三回生のとき指揮者に推薦された。とくに才能に恵まれている訳でもないのに、70 名ほどの団員をリードしていくのはたいへんだらうと畑先生にお話したところ、「多くの人に信頼されるには、何でもいから自分に一つのタブーを課し、それを守り通すことが一番である」という意味の話がされた。たとえば、「どんなに誘われても麻雀はしない」、「禁煙を守る」といったことでもいから、ひそかに決心し守り通すことで周りの人は信頼するものであるということであった。そしてそのタブーは、宣言したり、誰かに告げることなく、ただ守り通せばよいと言われた。思えばそうしたささやかな自己コントロールは、自然と周りの人に意志の強い人、ブレない人との印象を持たせ、信頼されるようになるのであろうか。その後の人生でも大いに役立ったように思う。

大学院修士課程 2 年目を迎えようとしていた時、地元熊本で県立美術館の学芸員の募集があり、運よく採用され、その後しばらく音楽から遠ざかっていた。

そうしたなか、1981 年 7 月 29 日のこと、仕事で京都に出張し、京都のホテルをとり、夜になって久しぶりに畑先生に電話をかけたところ、一人でホテルに泊まらないで呑みにこいということであった。す

でに閑学をはなれ、音楽学とも遠ざかり、日本美術史に転向して 9 年ほど経っていた私の突然の電話にもかかわらず、歓待していただいたことは生涯忘れたくない思い出となっている。おもうに、頼りない学生生活を送っていた私が社会に出て、少しは成長したのか随分気にかかっておられたのであろう。折からのチャールズ皇太子とダイアナ妃の結婚式の中継を見ながら、話は尽きず深夜におよび、そのまま泊めていただいた。いつまでも温かく気にかけていただいたことに感謝の念でいっぱいである。

全力投球の人生

小味淵 彦 之
(文学平 7、前美学平 10)

1991 年 4 月に私は関西学院大学へ入学し、文学部美学科の学生となりました。畑先生は当時すでに大学の学務が忙しかった時期で、学生部長を務めておられました。授業も最小限の数コマしか受け持っておられず、人文演習での畑先生の担当は秋になってからのように記憶しています。オーストラリアとその周辺地域の先住民であるアボリジニが、情報連絡のために楽器を奏でる様子を紹介したビデオを見ました。畑先生の研究の終着点の一つは、二度にわたって調査を行ったトレス海峡諸島民の音楽でした。現地でこうした事象に触れていたであろう先生の話はまことに説得力のあるもので、学問として音楽を捉えるのはこういうことかと思ったものです。「自分の目で見て、耳で聴かなあかんのやで」というのは、畑先生の学問に対する基本的な姿勢でした。

大学に入ったらオーケストラに入って打楽器をやってみたいという願いがかなえられたことは、今から思えば私の人生を左右するほどの大きな意味を持っていました。93 年に 3 年生になった私は晴れて

畑ゼミの一員となったのですが、畑先生はこの年から、関西学院交響楽団(関オケ)の顧問となられました。忙しい中、定期演奏会や演奏旅行に足を運んでくださり、打ち上げでの辛辣ながらユーモアたっぷりのコメントは大いに場を沸かせたものです。私の叩く打楽器のことを大そう褒めてもらい、「あれはプロになるで」と到底あり得ない言葉までいただいたのですが、美学研究室では相当前から「大げさの畑」と言われていたことを知るのは、もう少し後のことです。

大学4年生となる直前の正月のことでした。関オケ OB 数人と一緒に先生の甲陽園のお宅に招かれたことがありました。宴もたけなわ、今しかない！という決意のもと「先生、大学院に行きたいんです」と打ち明けました。そして返ってきたのは予想外の反応。「来るな～！絶対来るな！頼むからやめてくれ！就職しろ！お前仕事ないぞ！」今思うと当然の言葉なのですが、当時はいきなり否定されて面食らったものです。それでも結局私は大学院に進むことになりました。

畑先生は、酔っぱらうと思っていることを好き放題におっしゃるのですが、普段はなかなか本音を言わない方でした。慣れないとなかなか真意を計り兼ねて、誤解を生むこともあったように思いますが、文学部長、高中部長、そして 2004 年から院長と、学内での立場が変わる中で、こうした傾向はより進んだように感じています。きっと寝床で一人思い悩まれることも多かったように思いますが、時々酔っぱらってかかってきた意味不明の電話も懐かしく、今でも私のスマートフォンには先生の携帯電話の番号が引き継がれてメモリーに入っています。

最後に先生にお目にかかったのは、お亡くなりになる一か月ほど前の 2008 年 2 月中旬の事でした。病室のベッドに横たわる先生を見て、その尋常ではない姿にたじろぎましたが、「ぼくはいつでも全力投球やからな」とおっしゃったことを鮮明に覚えています。

68 歳は早すぎる死といってもよいのですが、生粋の関学ボーイとして関学に尽くした人生は、まさに全力投球でした。

ラトビア国立ヤーゼプス・ヴィートルス音楽学校学長室より、姉妹都市・神戸の関西学院大学交響楽団、及び指揮者畑道也教授に親しみを込めてご挨拶申し上げます。

わが街リガでの素晴らしいひと時に感謝申し上げます。

学長・教授 イマンツ・コカルス

1980 年 3 月 5 日



Jāzepa Vītola Latvijas Valsts konservatorijas rektorāts
sirsnīgi sveic
draudzīgās pilsētas Kobes pārstāvjus
Kwansei Gakuin universitātes
simfonisko orķestri un diriģentu
prof. Michiya Hata.
Pateicamies par jaukajiem brīžiem
mūsu pilsētā Rīgā.

Rektors prof. Imants Kokars.

5.03.80.

本誌第 27 号にも書きましたが、亡くなられる 2 カ月前、畑先生からお電話を頂戴しました。その時、関西学院交響楽団指揮者として、ソヴィエト時代に 2 度訪問されたりガの思い出を熱く語られました。「私はラトビアで指揮の極意を学んだ。ラトビア人音楽家と意気投合し、ラトビア人だけが集まる隠れ家に連れて行ってもらった。そこで、ロシア人の目を気にすることなく、音楽の話で盛り上がり、楽しかった。」

この写真と感謝状は、奥様の静子さんからお預かりしたものです。それぞれの詳細を生前、ご本人からお聞きする機会はありませんでした。(池田裕子)